



ネットの力, みんなのチカラ

——よりよい「魔法」の使い方

報告： **山口 浩** (やまぐち・ひろし)
国際大学 GLOCOM 客員研究員

Windows 95の登場とともにインターネットの本格的な普及が始まった1995年から数えて約15年。インターネットが世界のさまざまなところでいろいろなものを変え、いろいろなものに影響を及ぼすようになる動きが本格化してきた。その中には一般的に好ましいと考えられるものもあればそうでないものもあるが、近年は「陰」の部分への関心がとみに高まりつつある状況のように思われる。初期の熱狂を超え、冷静に見ようとするのは悪くないが、ここぞとばかりに「陰」の弊害を騒ぎ立て、規制強化を叫ぶばかりでは不毛である。プラスの価値を、いま一度評価し直すべき時期に来ているものとする。

「魔法」としてのインターネット

コンピュータとネットは、情報処理のツールであると同時にコミュニケーションの媒体である。この新たなツールを使い、人々がつながり、力を合わせることで、新たな価値が生まれる。同時に発生する弊害には、新たな対処方法が工夫される。技術と社会は相互に依存し、相互に影響を及ぼし合いながら発展していくものであり、一方が他方を縛る関係にはない。新たな技術を社会の中で生かしていくためには、社会の側にもそれなりの工夫が必要であろう。実際、社会の各所で工夫が行われ、新たな動きが始まっている。

「高度に発達した科学技術は魔法と見分けがつかない」という言葉がある。この表現に従えば、高度に発達した情報技術を日常的に使いこなす私たちは、ほんの少し前の人々から見れば、まさに魔法使い以外の何者でもない。その意味で、たとえば『ハリー・ポッター』シリーズの物語に登場するような魔法使いたちの住む「魔法界」で、魔法についてどのような法や制度があるかを想像してみることは、高度



に科学が発達した現代社会に住む私たちの社会のあり方を考える際に、少しは参考になるだろう。

「魔法」は、「技術」と同じように、人間の能力を何らかの点で拡張する。なかには杖のひと振りでも人を殺してしまったり、大きな災害をもたらしたりする危険なものもあるが、「魔法界」の人々は、だからといってこの「拡張された力」を単純に封印・禁止しよう

とはしない。それでは魔法使いである意味がないからだろう。むしろ、弊害を避けつついかに便利に活用するか、というスタンスをとる。弱者保護と強者の自由を両立させようというわけだ。

たとえば、弱者を一般から切り離して保護・教育する、というやり方もそうだ。保護と権利の制約が表裏一体となっていて、そのうえで、弱者から強者に移る道が一定の努力とともに開かれている。強者の側に立ったとしてもすべての自由が享受できるわけではなく、危険性が高いものについては、メリットと危険性の比較考量で、必要に応じ規制や制限が加えられる。新旧で対立する利害を調整する際、新たなものの側で調整することがしばしば行われるが、その逆の方がいい場合なら従来のシステムが変更される。そして何より重要なのは、力を備えた者が、その力に応じて、他人に任せるだけでなく、よい状況を守り、あるいは改善していくために力を合わせるとのことだ。

同じようなことが、インターネットについても言える。多くの利便性をもたらすネットにも、使い方を誤れば他人の権利を侵害したり傷つけたりする危険性がある。メリットを享受しつつ弊害を避けるための活動が、各所で同時多発的に起こっている。それを動かしているのは、ネットを使いこなす能力を備えた多くの人々の意識的、あるいは無意識的な協力だ。それらが完璧に機能しているとは言い難いが、社会のあり方が少しずつ変わってきていることからして、その意義が次第に大きくなってきていると言えるのではないか。

ネットを通じ、人々が力を合わせるにより、社会にどのような価値がもたらされるか、弊害を克服しメリットを享受するためにはどのようにしたらいいのか。新たな動きを、各領域の最前線で活躍している方々の話を通して多面的にとらえるべく、「ネットの力、みんなのチカラ」と題して、次のようなシリーズ講演会を企画した。

<<http://www.glocom.ac.jp/column/minna/>>

山口 浩(やまぐち・ひろし)

駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部准教授、国際大学GLOCOM客員研究員。専門はファイナンスと経営学。最近の研究テーマは予測市場等の集合知メカニズムおよび仮想経済。最近の論文に「予測市場と集合知メカニズムの現状と展望『神の手』と『衆愚』の間」(『経営システム』第20巻、第5号、2010)、近著に『リスクの正体!—リスクとの賢いつきあい方』(バジリコ、2009)など。

- 第1回 「趣旨説明・イントロダクション～プロとアマ、営利と非営利の新しい関係」
2010年10月26日 山口 浩(駒澤大学)
- 第2回 「ソーシャルメディア時代の政策渉外活動」
2010年10月27日 楠 正憲(マイクロソフト・GLOCOM客員研究員)
- 第3回 「ソーシャルジャーナリズムの可能性、私たちに何ができるのか」
2010年10月28日 藤代裕之(ジャーナリスト)
- 第4回 「ネットは社会をよくするか? ～MIAUの取り組み」
2010年11月4日 津田大介(ジャーナリスト・MIAU・GLOCOMフェロー)
- 第5回 「カンパセーションナル・マーケティング」
2010年11月11日 徳力基彦(アジャイルメディアネットワーク)
- 第6回 「ネットで政策決定過程はどのように変わったか/変わっていないか～現場感覚から」
2010年11月15日 境 真良(経済産業省・GLOCOM客員研究員)
- 番外編 第1回「地域社会とソーシャルネットワーク」
2011年1月18日 庄司昌彦(GLOCOM主任研究員)
- 番外編 第2回「ネットは社会をよくするか? ～ワシントンDC見聞録～」
2011年1月25日 山崎富美(ブロガー・GLOCOMフェロー)

講演者は、ネットの各分野、あるいは各分野のネットに近い領域で、それぞれ積極的に活動しておられる方々である。各回、講演とほぼ同程度の時間を質疑に割り、できるだけ議論をかみあわせること、通りすぎてしまいがちな「そもそも論」にも立ち帰ることを心がけた。テーマに直結する話ばかりでなく、講演者がそれぞれ、自分がどのように今の状況に至ったのかという「自分語り」を通して、「ネットの力、みんなのチカラ」について語っておられたのが印象的であった。こうした議論を通じて、新たな社会のあり方についての知見が多少なりとも蓄積されたいと思う。

若干の感想

このプロジェクトは、これ自体が「ネットの力、みんなのチカラ」を活用してコンテンツ制作を行う試みという、もう一つの「顔」を持っている。すなわち、この講演会シリーズを開催し、その模様を学生主体でネット中継する。録画映像および録音から文字起こしも同様に行って、電子書籍を制作、販売し、利益を著者に還元



する。同時に、紙の書籍を制作、同人ルートで販売し、利益を学生側でとる。この活動全体を山口が監修し、制作経過自体を指導してコンテンツの質の向上を図る、というものだ。その書籍は、完成すればそのプロジェクトの成果物ということになる。このような仕組みとした意図については、第1回の私の講演の中に含まれている。

各講師の講演や質疑の内容の詳細については、スペースが足りないので、上記の電子書籍を完成後にご参照いただくとして、ここでは最後に、全体を通して感じたことを3点ほど記録しておきたい。

(1) 「みんな」は「全員」ではない

「みんな」で力を合わせるといって美しく聞こえるが、それが文字通りの「みんな」、つまり「全員」を意味していることは実際にはあまりない。人の関心事項は人それぞれで、その能力もさまざまだ。第2回のテーマであった政策渉外活動、第6回のテーマであった政策決定過程などは、そもそも一般人がそう簡単に口をはさめる領域ではない。また、第3回のソーシャルジャーナリズムにせよ、第5回のカンパセーションナル・マーケティングにせよ、あくまで関心を持っている人たちが集まるものだ。無理に「全員」を参加させようとする自体、大きなムダや非効率を生むことが少なくない。

考えてみれば、だからこそ分業が発達したわけで、技術進歩により「誰にでもできること」の範囲が広がったとしても、それがすぐに「全員でやるべきこと」になるわけではない。すなわち、「みんなのチカラ」というのは、「関心のある人みんな」、場合によっては「機会や能力を持った人みんな」の力が場所や立場にかかわらず集まる状況、そしてその中で力のある人を見出され引き立てられる状況でこそ発揮される。そして、そうした機会を提供するのが、「ネットの力」であるというわけだ。

(2) 「違う」が「同じ」を支える

ウェブはフラット化をもたらす、とよくいう。ここでいう「フラット化」はしばしば、「これまでチャンスを与えられなかった者が、すでに地位のある者と同じように活躍できるチャンスを得る」といった意味で受け取られ、好ましいことのように語られるが、ここには誤解が多分に含まれている。ブログでもツイッターでも、あるいはYouTubeでもそうだが、力のある者となない者が同じ場に立てば優劣の差がはっきりするのは自然であり、新たな才能が発掘される場合もあるかもしれないが、多くは差が可視化されるだけに終わる。チャンスさえあれば自分も評価されるかもしれないといった期待の多くは幻想と判明する。もちろん、それはいわば当然の帰結なのであって何の不思議もない。機会の平等は結果の平等を意味しないとい

うだけのことだ。こうした差は実社会にもあるが、ネットの世界ではより幅広く可視化される。それがフラット化の意味だ。

ネットに期待を抱いた人の中にはそのことに幻滅したり反発したりしてしまう人もいて、よく軋轢が起きるが、見方を変えればこれこそがメリットでもあるから、単に結果の平等へ向けて修正すればいいというものでもない。このトレードオフを乗り越えるカギの一つは、私たち自身がそれぞれ、「ネット」の内外にある、複数の異なる「場」に同時に属しているという自覚を持つことであるように思われる。人が属する「場」がいくつかあれば、そのうちいずれかにおいてはそれなりの評価を受けることもあろう。そういった「場」があれば、社会全体から疎外されてしまうことはなく、ネットで実現された私たちの機会の平等が結果の不平等を生み出したとしても、ある程度までは受け入れられるのではない。

こうした「場」の選択肢を、ネットは大きく広げた。自分が「何者か」になるチャンスは増えたのである。番外編第1回で取り上げられた地域SNS (Social Networking Service) も、そうした「場」の一例だろう。ただ、価値観が一樣なままでは、多様な選択肢を持つ価値が認められにくい。私たちは、口では多様な価値観を賛美しながら、実際にはそこに軽重をつけていることが少なくないからだ。私たちが「違い」をいかに認め受け入れるかが、「同じ」場に立つという意味でのフラット化のデメリットを避けつつメリットを享受するための必須条件ではなからうか。

(3) 金銭につながらないことのデメリットとメリット

ネットの活動を直接的に金銭につなげようとするとなかなか難しい、という話はよくある。本シリーズ講演においても、複数の講演者からこの趣旨の話が出た。だが、これは必ずしもデメリットとは限らない。ネットを使ってみんなの力が集まる際、人は必ずしも金銭的動機で動いているわけではなく、興味や楽しみ、あるいは自己表現といった非金銭的動機である場合も少なくないからである。むしろ金銭がからまない方が有効であるような場合もあろう。すなわち、「金銭につながらないこと」は、ネットでみんなの力を集めて何かをしようという場合には、制約条件ともなれば可能性を開くものともなる。となれば問題はそれらの切り分け・組み合わせであり、その点での新たな工夫が、たとえばオープンガバメントにせよカンパシーショナル・マーケティングにせよ、出てきているということなのではなからうか。